

- 武田喬男, 1974: 集中豪雨の降水特性と微物理学的過程, 気象研究ノート, 120, 81-95.
- , 1977: 雲物理学的にみた地形の効果, 天気, 24, 43-53.
- 武田喬男, 二宮洸三, 1977: 日本の豪雨・豪雪, 科学, 47, 138-148.
- 立平良三, 1974: レーダ観測と解析, 気象研究ノート, 120, 1-16.
- 吉住禎夫, 1974: 大雨を伴う梅雨前線帯の構造, 気象庁技術報告, 86, 36-52.

—, 1974: 梅雨前線帯の中間規模擾乱, 気象庁技術報告, 86, 67-83.

C. 関連した分野の書物, 報告

- 川畑幸夫, 1961: 水文気象学, 地人書館, 268頁.
- 水越允治, 1969: 大雨の気候学, 現代気候学論説, (東京堂 262頁), 227-242.
- 小倉義光, 1966: 最近の気象力学, 気象研究ノート, 17, 1-61.
- 斎藤直輔, 1957: 雨量予報序論, 105頁, 気象協会.



福地 章著

海洋気象講座

成山堂書店, 1975, 328頁, A 5 版, 3, 500円

最初に, 本書の「海洋気象」という標題から, 海洋上における気象, あるいは海洋の影響を受けた特徴的な気象についての著書であると期待したが, 内容は航海者のための気象と海洋の基礎知識の解説書であった。

気象に関しては, 15章129項目が225頁にわたって解説されており, 海洋に関しては, 5章28項目が65頁にわたって書かれている。気象学と海洋学の初等的教科書で, かつ航海士の国家試験用参考書ともなるように企画されたせいか, 項目の取り上げ方が全く標準的, 古典的で新鮮さを感じさせない。

初学者を対象として, 説明はきわめて平易で, 気象観測, 気象通報など実務者が直ちに利用できる事項を網羅してなかなか便利な本である。2, 3の点で正確さを

欠く説明が見受けられるが, 解説の平明を意図した著者の考えから止むを得ないことであろう。また, なるべく多くの項目を取り上げようとしたために, 個々の項目の説明が簡略すぎて相互の関連性が曖昧になってしまった。

内容について感じたことを列記してみよう。まず, レーダ, 人工衛星など最近の技術が気象観測に果たしている役割と, これから得られる新しい情報について触れていない。テレビ放送, その他で一般に利用されていることを考えると, 当然取り上げるべき項目であろう。さらに, 気象に及ぼす海洋の影響, あるいは海洋に及ぼす気象の効果が解説されていないのは残念である。

航海の実務者を対象に考えると, 地表風の説明をもう少しいねいにすべきであろう。大気安定度が風に及ぼす効果とか, 下層大気中の風の構造の特徴などがここでは取り上げられていないし, 最適航海のことも触れて欲しい項目の一つである。波とうねりの項では, 最近の20年間に著しく進歩した波浪の研究をふまえて, 風波の性質や, 理論的波浪予報法についても述べて欲しかった。外洋波浪の現況図と予報図が実際にファックス放送され, 一般の利用に供されているからである。

(磯崎一郎)